



TITLE:

滿と解--晉南朝人事制度の再検討に
むけて

AUTHOR(S):

藤井, 律之

CITATION:

藤井, 律之. 滿と解--晉南朝人事制度の再検討にむけて. 東方學報 2010,
85: 107-132

ISSUE DATE:

2010-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/131788>

RIGHT:

滿と解 ―― 晉南朝人事制度の再検討にむけて ――

藤井律之

はじめに

劉宋の大明八年、孝武帝が崩御すると、その皇太子劉子業が即位した。前廢帝である。前廢帝の太子がまだいなかったこともあって、東宮の官は省かれることとなったが、東宮の屬官である太子左衛率の薛安都と、太子中庶子であった殷恆の轉出先をめぐって、吏部尙書の蔡興宗と太宰の劉義恭との間で次のような議論がなされた。

時に薛安都散騎常侍・征虜將軍・太子左率爲り、殷恆中庶子爲り。（蔡）興宗先に安都を選びて左衛將軍と爲し、常侍故の如く、殷恆黃門と爲し、校を領せしむ。太宰安都の多と爲すを嫌い、單に左衛と爲さんと欲す。興宗曰く、率衛相い去ること、唯阿の間たり。且つ已に征虜を失わば、乃ち超越に非ず、復た常侍を奪わば、頓りに降貶と爲らん。若し安都晩達の微人と謂わば、本より宜しく裁抑し、名器をして輕からしめざるべく、宜しく貫序有るべし。謹みて選體に依り、安都に私するに非ず、と。（劉）義恭曰く、若し宮官宜しく超授を加うべくんば、殷恆便ち應に侍中た

るべし、那ぞ黃門と爲るを得るのみならん、と。興宗又た曰く、中庶・侍中、相い去ること實に遠し。且つ安都の率と作ること十年、殷恆の中庶たること百日のみ、今また校を領せしむれば、少とは爲さざるなり、と。選令史顏樟之・薛慶先等をして往復論執せしめ、義恭然る後に案に署す。既に中旨もて安都を以て右衛と爲し、給事中を加えしむれば、是れにより大いに義恭及び（戴）法興等に忤い、興宗を吳郡太守に出す。（『宋書』卷五七 蔡興宗傳）

それぞれの人事に對して、劉義恭がクレームを付け、蔡興宗がそれに抵抗していることが分かる。最終的に蔡興宗の抵抗は失敗し、吏部から吳郡太守へと轉出させられてしまふのだが、二人の議論の内容は、當時の人事制度を検討する上で非常に重要である。

まず、薛安都の散騎常侍・征虜將軍・太子左衛率から左衛將軍・散騎常侍への異動案について、劉義恭は「多」を嫌つて、散騎常侍を加えず左衛將軍のみを與えるべきだ、とした。それに對して蔡興宗は、「率衛相い去ること、唯阿の閒たり」——太子左衛率から左衛將軍への異動は、横滑りと殆ど代わらない程度の昇進に過ぎず、なおかつもと保持していた征虜將軍が省かれており、さらに散騎常侍までも奪つてしまえば降格人事になる、と述べている。すなわち散騎常侍を加えれば昇格、加えなければ降格となるわけである。一方、殷恆の太子中庶子から黃門郎領校——黃門郎が五校尉のいずれかを領すること——への異動案について、劉義恭は黃門郎ではなく侍中とすべきだと主張した。それに對して蔡興宗は、殷恆の太子中庶子在任期間が百日であつたこと、「中庶・侍中、相い去ること實に遠し」——太子中庶子から侍中への昇進は破格であり、また單なる黃門郎ではなく校尉も加えてあるから降格とはならない、と述べている。すなわち太子中庶子から單に黃門郎となつただけでは降格となるが、校尉を領した黃門郎への異動は少なくとも降格にはならないわけである。

當時は官品の上下よりも官職の清濁の方が重視されていたため、官品とは乖離した人事が行われていたのだが、それ以外にも官職を加えることによって昇進とみなす人事がなされていたことがわかる。岡部毅史氏は、この兩人のやりとり

注目し、南朝の官資は必ずしも一つの官職のみによって表現されるのではなく、加官などを含めた、官人が帯びる肩書き全てに注意する必要があることを指摘され、官人の地位を調整するために加えられる官職を、地位の重さを調節する「分銅」という巧みな比喻によって表現された。^①

周知の通り、南朝には隋唐の如き散官と職事官の区別は存在せず、岡部氏の指摘された、官人の地位が單獨の官職ではなく、官人が帯びた全ての官職によって表象されるという事實は、漢代の制度が隋唐のそれへと改變されていく過渡期の特質といえる。筆者も岡部氏の驥尾に付して、南朝の侍中が左右衛將軍や五校尉などを兼任した事例を中心とした、加官による官人の地位の變動について検討したが、^②こうした南朝人事制度の特質・獨自性は、その制度的淵源である晉代の制度とともに、さらに検討されるべき問題である。

さて、晉南朝の人事制度のうち、異動手続きに關する先行研究は、大きく二つに分類することができる。第一に、大庭脩氏による、官吏の辭令書である告身に關する研究、および野田俊昭氏による吏部の擬官に關する研究で、これらは、官吏の任命手続きに關わるものである。^③第二に、越智重明氏や中村圭爾氏による、除名に關する——ただし、人事制度というよりは身分制研究の性格が強い——研究、および岡部毅史氏による免官に關する研究で、これらは、官吏の罷免に關するものである。^④

前者は官吏のキャリアのスタートに（あるいはその途中）關するものであり、後者はそのゴールに關するものと言い換えることもできるが、後者は懲罰人事であり、言うまでもなく、任期滿了などその他の方途によっても官吏は職務から離れる。こうした穩當な人事異動に關しては、晉南朝のみならず魏晉南北朝史研究においては從來關心が持たれてこなかった。それは論じるまでもないテーマとみなされていた、というよりは魏晉南北朝史研究の資料上の制限が影響しているように思われる。先に舉げた大庭氏の研究には「木から紙へ」という副題が附されているが、文中にて述べておられるように、魏

晉南北朝史の人事制度研究には漢代の簡牘史料や唐代の敦煌・吐魯番出土の紙文書といった出土文字資料をあまり期待することが出来ず、殆どを正史に依據せざるを得ない。頼みの綱であるはずの正史も、平々凡々とした人事異動に對しては極めて冷淡である。しかし、そうした乏しい資料の中からも、前後する漢・唐との制度上の差異を見いだし得ると考える。本稿は「滿」と「解」という二つのチームを中心に考察する。この二つは、中國專制時代の官僚制においてなじみの深い言葉であり、漢・唐においても人事と關連して用いられていた。しかし、人事用語としての「解」の意味するところは、漢と唐では全く異なるといってよい。この變化が生じたのは、後に觸れるように西晉時代と考えられるのだが、管見の限り、この點を指摘した研究はないようで、これら二つのチームの考察を通じて晉南北朝人事制度の特質について述べることも充分可能ではないかと思われる。まず「滿」から論ずることとしよう。

一 滿報と滿敘

宋の明帝は、その即位前に勃發した晉安王劉子助による反亂鎮壓の軍事費を捻出するため、賣官を行った。その具體的な内容は次の通りである。

時に軍旅大いに起こるも、國用足りず。民に募りて米二百斛、錢五萬、雜穀五百斛を上さば、同じく荒縣除を賜う。米三百斛、錢八萬、雜穀千斛を上さば、同じく五品正令史・滿報を賜う。若し四品に署し家に在らんと欲さば、亦た聽す。米四百斛、錢十二萬、雜穀一千三百斛を上さば、同じく四品令史・滿報を賜う。若し三品に署し家に在らんと欲さば、亦た聽す。米五百斛、錢十五萬、雜穀一千五百斛を上さば、同じく三品令史・滿報を賜う。若し内監に署し家に在らんと欲さば、亦た聽す。米七百斛、錢二十萬、雜穀二千斛を上さば、同じく荒郡除を賜う。若し諸王國三令

に署し家に在らんと欲さば、亦た聽す。〔『宋書』卷八四 鄧琬傳〕

穀物と錢の量に應じて、荒縣の縣令から荒郡の郡守までが賣官の對象となっていてことがわかる。ここで注目したいのが満報なるチームである。満報は南朝正史ではこの記事にしか見えないため注目されてはいないのだが、かつて宮崎市定氏が勳位の成立にかんして論じた際にこの記事を引用したことがあり、次のように述べられた。

満報の意味明かでないが、令史をある任期の間、實際に務めさせて、満期を報じさせる條件ということであろう。⁽⁵⁾

この『宋書』鄧琬傳中の記事は『資治通鑑』に節略した形で次のように引用されている。

時に軍旅大いに起こるも、國用足りず、民の錢穀を上す者を募りて、賜うに荒縣・荒郡、或いは五品より三品に至るまでの散官を以てすること差あり。〔『資治通鑑』卷一三一 宋紀一三・泰始二年條〕

そこに胡三省は次のような注をつけている。

荒郡・荒縣とは、極邊郡縣の兵を被りて荒殘せる者なり。これを賜うとは、郡守・縣令及び參佐等の職名を以てこれを賜う。

すなわち胡三省は、この賣官は實職を與えるのではなく、名目のみを與える措置だと解釋している。

『宋書』鄧琬傳の記事にもどると、納入した量によっては、與えられる官職に選擇肢がついていることがわかる。米三百斛、錢八萬、雜穀千斛以上を納めた者を例に擧げるならば、「五品正令史・満報」と「四品在家」が選擇できるわけである。省略されているが、この場合選擇可能なのは満報の五品正令史か在家の四品正令史であり、満報の正令史もしくは一品上の在家正令史だと言い換えることができる。そうすると宮崎氏の指摘のごとく満報を「ある任期の間、實際に務めさせて、満期を報じさせる」と解釋した場合、次のような疑問が生じる。すなわち満報の令史はどこで勤務するのか、という点である。先述の胡三省注が指摘しているように、實際に任地に赴くとは考えにくいのだが、實際に役所に出向くとすればさ

らなる疑問が生じる。「五品正令史・滿報」と「四品在家」を天秤にかけた場合、實際に役所に出向いて滿期まで働かねばならない五品正令史より、在宅勤務が可能で官品も高い四品令史の方を選択するであろうことは目に見えており、わざわざ選擇肢を設ける理由が理解できなくなるからである。このように、宮崎氏の説によって『宋書』鄧琬傳の記述を解釋するのは困難であり、滿報には別の意味を想定しなければならない。

滿報を理解するために次の記事に注目したい。

（延興元年八月）丁未、詔して曰く、新安國五品以上、悉く滿敘を與え、此れより以下、皆な解遣するを聽す。其れ仕えんと欲する者、其の樂う所を適えよ。〔『南齊書』卷五 海陵王紀〕

これは南齊の新安王・蕭昭文が即位した際に發せられた詔であるが、彼は當時西昌侯であった蕭鸞の傀儡にすぎなかった。その蕭鸞は爵位を宣城王へと進めたのち蕭昭文を廢位して、自身が帝位につくこととなった。その際彼は次のような詔を發している。

（建武元年十一月）又た詔すらく、宣城國五品以上、悉く滿敘を與え、此れより以下、皆な解遣するを聽す。其れ仕えんと欲さば、樂う所を適えよ。〔『南齊書』卷六 明帝紀〕

蕭昭文・蕭鸞兩名が下した詔は、一見して明らかなおとおり、即位前の王國名以外まったく同一の構文である。兩者が皇帝となつて新安國および宣城國が消滅したために先述の二つの詔が發せられ、王國五品以上の官は「滿敘」を與えられ、六品以下は解遣、すなわち解散させられたのであった。

筆者はこの滿敘こそが先程の滿報と同じ意味を有するチームであると考ええる。その傍證として次の記事を挙げたい。これは東晉末、劉毅が不仲であった劉敬宣のことを劉裕に讒言した際の記事である。

（劉）毅これを知り、深く以て恨と爲す。江陵に在るに及び、（劉）敬宣還るを知り、乃ち人をして高祖に言わしめて曰

く、劉敬宣父子、忠國既に味く、今また不豫の義始まる。猛將勞臣、方須に叙報すべく、敬宣の比の如きは、宜しく後に在らしむべし。若し使君平生を忘れず、相い申起せんと欲さば、資を論じて事を語り、正に員外常侍と爲すべきのみ。已に其れに郡を授くを聞き、實に過優爲り。尋いで復た江州と爲すを知り、尤も駭惋する所なり。〔『宋書』卷四七 劉敬宣傳〕

ついでやはり東晉末の記事であるが、風雹の害に關する徐廣から劉裕への進言である。

時に風雹の災を爲すあり、〔徐〕廣書を高祖に獻じて曰く、風雹の變未だ必ずしも災とは爲らず、古の聖賢輒ち懼れて己を修むるは、政化を興して德教を隆んにする所以なり。……明公初めて義旗を建て、宗社を匡復し、神武運に應じ、信宿して夷を平らぐ。且つ恭謙儉約にして、心を虚しくして懈らず、來蘇の化、功用神の若し。頃ごろ事故既に多く、刑德並び用い、戰功殷積するも、報・叙盡し難く、萬機繁湊するも、固より應に速かにし難し。且つ小細煩密、群下懼れ多し。〔『宋書』卷五五 徐廣傳〕

この二つの記事で注目したいのが敍報および報敍である。これらが何を意味するか、前者の『宋書』劉敬宣傳は、本來「敍報」すべき猛將勞臣をさしおいて劉敬宣に郡太守を授けたことを非難していることから考えると、「敍報」とは官職を與えて猛將勞臣に報いてやると考えておそらく大過なく、後者の「報敍」も、戰功（をあげた人物）が數多く蓄積されているにもかかわらず、それら全てに報敍することは困難であると述べていることから、やはり報賞として官職を與えるという方向で解釋しうる。つまり、「敍報」と「報敍」は轉倒しつつも同じ意味を有しており、滿報の報とは宮崎氏がいうような「報じさせる」という意味ではなく、「報いてやる」と解すべきであり、人事用語としての報は敍と同じく「官職を與える」という意味を有すると考えられるのである。

さらに、報も敍もつかない「賜滿」という用例も存在する。

(建元元年)六月辛未、詔すらく、相國驃騎中軍三府の職、資勞に依りて二宮に度すべし。若し職限已に盈たば、餘す所滿を賜うべし。『南齊書』卷二 高帝紀下)

(天監元年三月)癸未、詔すらく、相國府の職吏、資勞に依りて臺に度すべし。若し職限已に盈たば、度す所の餘、及び驃騎府、並びに滿を賜うべし。『梁書』卷二 武帝紀中)

前者は、蕭道成が宋からの禪讓を受けて即位した後ほどなくして發した詔で、皇帝となった蕭道成と皇太子となった蕭贍の即位前の官(蕭道成は相國・驃騎大將軍、蕭贍は中軍大將軍)の府が宋齊交替によって消滅したことに對する措置であり、先にみた蕭昭文・蕭鸞とほぼ同様のケースである。後者は、蕭衍がやはり南齊からの禪讓を受けて即位したさいに發した詔で、皇帝となった蕭衍が、即位前に任ぜられていた相國と驃騎大將軍の府が齊梁交替によって消滅したことに對する措置であり、蕭道成の詔とほぼ同じであることがわかる。前者の詔は、相國府・驃騎大將軍府、中軍大將軍府のスタッフを、資——キャリアと勞——勤務日數を勘案した上で二宮すなわち東宮の官へと轉任させるものである。^⑥後半部分は少々厄介で、職限はふつう任期を指すのだが、員限——すなわち定員數として解釋しなければ、キャリアと勤務日數が勘案されているにもかかわらず任期滿了した人物が轉任できないこととなり、文意が通じない。後半部分は、轉任先である東宮官が定員に達したならば、轉任しきれなかったもの達には、「滿」を賜與すると解釋するべきであろう。後者の蕭衍の詔では相國府のみが轉出の對象となっていて、資と勞を勘案した上で臺——ここでは尚書臺や御史臺など特定の官署を指すのではなく、おそらく朝廷の各所を指すと思しい^⑧——へと轉任させている。やはり前者と同じく、定員に達したならば轉任しきれなかったもの達と驃騎大將軍府のスタッフに「滿」を賜與した、と解することができる。

蕭道成・蕭衍の詔によって賜與された「滿」とはいったい何であろうか？

初め、文帝の世、年三十に限りて郡縣に仕え、六周すれば乃ち代を選ぶ。刺史或いは十年餘なり。是に至りて皆なこ

れを易え、仕うる者長少に拘らず、人に泣むこと三周を以て満と爲せば、宋の善政是においてか衰えたり。『南史』卷

二〇 謝莊傳

晉・宋の舊制、人に宰たるの官、六年を以て限と爲す。近世六年過久なるを以て、又た三周を以て期と爲し、これを小満と謂う。而れど遷換去來すること、又た三周の制に依らず、故きを送り新しきを迎え、吏人道路に疲れり。『南史』

卷七七 恩倖傳・呂文顯

晉から宋の文帝期まで、郡縣の長官の任期は六年、刺史の任期は十餘年にもわたった。それが長きに過ぎるとして、孝武帝は任期を三年としたところ、今度は逆に三年の任期を満たさずに頻繁な遷轉が流行する羽目になった、という。⁽⁹⁾ここで、恩倖傳が短縮された任期を小満と呼んでいるように、蕭道成・蕭衍の詔において賜與された「満」とは任期、より正確に言うならば任期満了の意味と筆者は考える。では任期を満了させることがなぜ恩典となりうるのでしょうか。蕭道成・蕭衍の詔にて「満」を賜與されたのは、次のポストが用意されていない連中であり、蕭道成・蕭衍の即位によって彼らは無官となってしまふ。しかし次のポストは用意できないにしても、任期を満了したということにすれば、無官ではあっても——唐代の用語を借りるなら「前資」の状態となって、少なくとも現任であったときと同等の地位は保證しうる、と考えることができよう。

そしてこの假定は満敘にも適用できる。先述のごとく、蕭昭文・蕭鸞の即位によって、新安國・宣城國は消滅することとなった。兩者の即位は王朝交代ではなく王朝内交代ということもあって、新安國・宣城國のスタッフに次のポストを與えるまでには至らなかった。そのため五品以上のものには満敘を賜與して任期を満了した扱いとし、無官ながらも現任であったときと同等の地位を保證してやったわけである（もっとも六品以下は切り捨てられてしまっているが）。

それでは満報、すなわち冒頭の『宋書』鄧琬傳はどう解釋すればよいのであろうか。ふたたび、米三百斛、錢八萬、雜

穀千斛以上を納めた者に與えられる、「五品正令史・滿報」および「四品在家（令史）」を例に挙げよう。「賜滿」「賜滿敘」の時と同様に考えるならば、「五品正令史・滿報」とは、すでに任期を滿了した五品正令史であって、官職が與えられるのではなく現任と同等の地位が與えられる。それに對して、四品在家令史は在宅勤務として實際の官職が與えられるが、以公事免——すなわち職務上の過失（在宅勤務の令史にどのような職責が課せられたのか不明ではあるが）によって免官とされ、その地位を失う可能性がある。換言すれば、五品正令史と同等の地位を得るか、もしくは一品高いが任期を滿了するまでは免官のリスクをとまう在宅勤務を選ぶかが天秤にかけられていたのである。

以上、滿・滿敘・滿報について論じ、滿・滿敘・滿報の賜與とは、任期を強制的に滿了させ、無官ながらも現任と同等の地位を保證する措置であるという結論に達したのであるが、大過なく任期を滿了した官吏には滿了後も現任と同等の地位が保證されるという、中國專制時代の官僚制度において至極當然のことを述べたにすぎない。これに先立つ漢代についていえば、かつて大庭脩氏が漢代の官吏の大半が「功次」、すなわち勤務日數を積みかさねて昇進していたことを指摘され、その後、佐藤達郎氏が大庭氏の所説を補強・發展させ、「（以）功次」は「功滿」「勞滿」「限滿」「秩滿」などといった任期滿了を示すタームと同義であることを論證された。^⑩すなわち任期を滿了して一つずつキャリアをステップアップするという人事制度は漢代より始まるのであるが、任期滿了した官吏がいかなる状態におかれていたのか、漢代ひいては魏晉期の史料にも直接明示するものではなく、後世の制度から推測するほかなかったのである。

さて先程、唐制から用語を借りて、滿・滿敘・滿報を賜與された官吏は「前資」の状態となると述べたが、官吏が任期を滿了して離職することを唐制では得替と呼ぶ。

諸そ理を以て官を去らば、見任と同じ。解くこと理に非ずと雖も、告身應に留むべき者、亦た同じ。

疏。議して曰く、犯罪に因らずして解くと謂う者、致仕・得替・省員・廢州縣の類の若し。應に議・請・減・贖に入

るべき及び蔭親屬なる者、並びに見任と同じ。〔唐律疏議〕卷二 名例〕

得替は以理去官のうち「不因犯罪而解者」に含まれ、見任と同じものとして扱われている。ここで注意しなければならないのは、『唐律疏議』のいう以理去官の中に省員が含まれている点である。そもそも蕭道成らが満なり満叙を賜與したのは、彼らが即位したことによって即位前の官府が消滅したからであり、これは『唐律疏議』でいうところの省員にあたる。もし唐制と同様に省員によって官職を失った官吏が現任と同等の地位が保證されるのであれば、わざわざ満や満叙を賜與する必要がないのであり、換言すれば、南朝においては、省員の場合には現任と同等の地位を與えられなかったことになる。

このように、以理去官——以理解官と呼ばれることもある——の定義は南朝と唐制との間で若干のズレがあるのだが、そもそも以理去官・以理解官なるものは漢代には存在せず、西晉以降に整備されていくものであり、南朝ではいまだ發展途上段階にあったと考えなければならない。しかしながら見方をかえるならば、以理去官・以理解官を通じて、晉南北朝の制度上の特質を明らかにすることもできる。章をあらためよう。

二 解職と代替となる官職

まず、當時における去官・解官の基本的性質について簡単に整理しておきたい。先に述べたように以理去官は以理解官と呼ばかえられることがあるが、晉南朝では解・解官・解職と呼ばれることが多いため、本章ではもっぱら解について述べることにする。後世ではやはり常識に屬することではあるが、晉南朝における解は免・免官とは異なり、單に官職から離れることを意味するだけであって、懲罰の意味は含まれない。

尋いで右軍將軍を領し、又た丹陽尹を領し、本官故の如し。(天嘉)五年、父を葬るを以て、表を拜して自解し、詔して絹布五十匹、錢十萬を賜い、葬訖るまで宅に停まりて郡事を視せしむ。服闋き、還りて本職に復す。其の年秩滿ち、尹を解き、散騎常侍を加え、將軍・尙書竝びに故の如し。『陳書』卷十七 袁樞傳)

陳代に丹陽尹となった袁樞は、父の喪に服するため一旦丹陽尹を解き、父の埋葬を終えて復職した。その後、秩滿、すなわち任期滿了によって丹陽尹を解かれている。後者の解はまさしく前章にて引用した唐律にみえる得替による以理解官の事例といえる。

ついで免と解の差異を明示する史料を舉げておこう。

孝建三年、太常に除され、意尤とも悦ばず。これを頃らくして、表を上して職を解かんとして曰く……僧達文旨抑揚あれば、詔して門下に付す。侍中何偃其の詞不遜なるを以て、南臺に付さんことを啓し、又た坐して官を免ぜらる。

『宋書』卷七五 王僧達傳)

南宋の孝建三年、太常に任ぜられた王僧達はそれを不服として解職を求めたが、その言いぐさが孝武帝の癪にさわたったのか、王僧達の上奏文はまず門下省に下されて審議された後、南臺すなわち御史に案件がまわされた結果、王僧達が希望した解職ではなく免とされてしまった。

時に殿内隊主吳璉、及び宦官李善度・蔡脫兒等多く請屬する所あるも、(蕭)引一に皆な許さず。引の族子密時に黃門郎爲り、引を諫めて曰く、李・蔡の勢、在位皆なこれを畏れ憚る。亦た宜しく小く身計を爲すべし。引曰く、吾の身を立つること、自ら本末あり、亦た安くんぞ李・蔡の爲に行いを改むること能わん。就し平らかならざらしまば、職を解くに過ぎざるのみ。吳璉竟に飛書を作り、李・蔡これを證し、坐して官を免ぜられ、家に卒す。時に年五十八。

『陳書』卷二一 蕭引傳)

陳の後主期、建康令であった蕭引は、吳璉や李善度・蔡脫兒の請託を頑として受け付けなかった。族子の蕭密が諫めても、せいぜい解職程度ですむとたかをくくっていたのだが、吳・李・蔡三名の結託によって蕭引は免官となったのであった。

南朝では、唐代と同様、免官せられた官人は、一定期間の禁錮（仕官禁止）の後、罷免された時より低い地位からキャリアを再スタートさせていたことはつとに知られていて、西晉時代に既に同様の規定があったことを岡部毅史氏が推測しておられるが、解にかんしてもやはり單なる離職を示す西晉期の事例を挙げることができる。^⑬

咸寧の初め、父の爵を襲い、太子洗馬を拜し、尚書右丞に累遷す。出でて冀州刺史と爲るも、繼母杜氏（傳）咸の官に之くに隨うを肯ぜず、自ら表して職を解く。三旬の間、司徒左長史に遷る。『晉書』卷四七 傳咸傳

傳咸は冀州刺史を解職したのち、わずか三十日で司徒左長史となっており、免官とは明らかに異なる。しかし、曹魏では解・解官などの用例を見いだすことができない。魏晉に先立つ漢代においては、人事用語としての解は「解印綬去」という形でしか用いられず、これは晉南朝の「輒去官——輒りに官を去る」あるいは「擅去官——擅まに官を去る」に相當する一種の職務放棄であり、晉南朝では免とされてしまうのである。^⑭ よって、單純に官職から離れるだけの解と、ペナルティが付加される免との差異が設けられたのは西晉から始まると推測することができらう。

さて、前章において、唐律にみえる以理去官・以理解官に關する規定を引用したが、唐令にも以理去官・以理解官に關する規定が見える。

凡そ職事官の應に觀省及び疾を移すべきは、程を過ぎるを得ず（謂うところ、身に疾病の百日に滿つるあり、若しくは親しくする所の疾病二百日に滿つ及び當に侍すべき者、並びに官を解きて省に申べ以て聞せよ。其れ應に人に侍すべきも才用灼然、要にして驅使に籍る者は官を帶びて侍養せしめよ）。『大唐六典』卷二 吏部

仁井田陞氏が選舉令に比定したこの規定によれば、自身の病氣が百日に滿ちた場合に加え、親の病氣が二百日に滿ちた場

合でも官を解くことができた。この規定は、漢代のそれと比べたとき非常に大きな差異を見いだすことができる。

集解、如淳曰く……或いは賜告と曰い、官を去りて家に歸るを得。與告、官に居るも事を視ず。

索隱…按ずらく、注の賜告とは、官を去りて家居するを得。予告とは、官に居るも事を視ざるなり。(兩者とも『史記』

卷二〇 汲黯傳注)

漢律、吏二千石予告・賜告あり。予告とは、官に在りて功の最たるあらば、法の當に得るべき所の者なり。賜告とは、病三月に滿たば當に免すべきも、天子優賜し、其の告を復し、印綬を帶び、官屬を將い、家に歸りて疾を治むるを得しむるなり。(『史記』卷八 高祖本紀・集解所引孟康注)

ここに引用した漢代の休暇制度である賜告・豫告にかんしては大庭脩氏の專論があり、氏の結論に筆者が何かを付け加える餘地はない。さて、前引の唐令と比較しなければならないのは病氣となった官人に特別に皇帝から賜與されるという賜告である。『史記』汲黯傳の各注には「得去官歸家」あるいは「得去官家居」と、「官を去」る旨が記されているものの、高祖本紀の孟康注に引用された漢律によれば、官職のシンボルといふべき印綬を帶びたまま家に歸されており、實際に職を解かれてはいいことがわかる。換言するならば、漢代では病氣の際には、一般には一定期間を過ぎると罷免され、特例としても休暇が與えられるだけに過ぎなかったものであり、規定の日數を滿たす必要があるもののいったん離職して療養させる唐制とは發想が根本的に異なるといえる。

それでは、何故西晉時代に免とは別個に解なる制度が生じたのであろうか。後漢以後、儒教道德が浸透し、その結果、禮の過剰なアピールが社會風潮となつていった。それに足並みを合わせるように、公卿・二千石・刺史が親のために三年の喪に服することが一時的に許可されたことはあったが、不便であるとして短期間で取りやめられ、結局漢代では、親への三年服喪は制度として確立されず、三六日間の忌引きが與えられただけであつたという。これはやはり大庭脩氏が指摘

するところである。

しかし、魏晉交代によって司馬炎が即位すると、まず即位の恩典として、三年の喪に服すべき將吏に服喪を遂げる許可を與えたことを嚆矢として、泰始三年には二千石が、太康七年には大臣が兩親のために三年の喪に服することが許可された。^⑬『宋書』卷十五 禮志二が、

太康七年、大鴻臚鄭默の母喪し、既に葬れば、當に舊に依りて職を攝るべきも、固く陳べて起たず、是において始めて大臣に制して喪三年を終えるを得しむ。然るに元康中、陳準・傳咸の徒、猶權奪を以て、禮を終えるを得ず、茲れより今に至るまで、往往にして以て成比と爲るなり。

と述べるように、大臣の服喪は、途中で強制的に終了させられることがまま存在したが、制度上、大臣・二千石が三年の喪に服することが可能となったのである。前に引用した傳咸の解の事例は泰始と太康の間にあたる咸寧年間のもので、司馬炎が即位の恩典を賜與した際、あるいは新たな施行された泰始律令にて解の規定が定められたのであろう。

いったん解職規定が定まると、解職理由はなし崩しに廣がっていくことになるが、その理由として考えられるのが九品官人法——特に清議の影響である。九品官人法施行後、違禮行爲が清議によって彈劾され、さらには郷品の引き下げへと直結するようになると、官人の舉措は否が應でも禮を重視する方向にむかわざるをえなくなった。ただし、官人の側も清議によって一方的に抑えつけられていただけではなく、禮を逆手に取ったことによって解職理由が擴大していくのである。

神矢法子氏の指摘によれば、西晉以降、職名・赴任地名が父の諱に觸れる、あるいは屬僚の諱が父のそれと同じ、などの理由で官人が解職を要求し、皇帝がそれを承認、あるいは配置換えするようになったという。^⑭つまり、西晉初に解職規定が定められたことにより、親をダシにすれば免に付隨するペナルティを科せられることなく解職し、堂々とサボター

ジユできるようになったのである。⁽¹⁹⁾ 前述の傳咸の事例も、繼母を理由としたものであった。

官人が解職あるいは配置換えを要求した理由の中には、禮書の定める規範を逸脱するもの含まれていた。神矢氏も検討された、孔安國の事例を挙げよう。

太元十三年、孔安國を召して侍中と爲す。安國表するに黃門郎王愉の名私諱を犯し、連署するを得ざるを以てし、解かんことを求む。有司議して云く、名は終りてこれを諱む、心の同じくする所有り、名を聞きて心懼る、亦た前詔に明かなり。而して禮に復た、君所私諱無く、大夫の所公諱有り、と云えば、私諱無し。又た云わく、詩書は諱まず、文に臨みては諱まず、と。豈に公義私情を奪い、王制家禮を屈するに非ざらんや。尙書安衆男臣先中兵曹郎王祐の名父の諱を犯すと表し、職を解かんことを求む。明詔爰に發し、曹を換うるを聽許す。蓋し是の恩制の外に出るのみ。

而して頃者互いに相い式を瞻、源流既に啓かれ、其の極を知る莫し。夫れ皇朝の禮大にして、百僚職を備え、官を編み署を列ね、動もすれば相い經渉す。若し私諱を以て、人其の心を遂ぐれば、則ち官を移し職を易え、遷流已むこと莫からん。既に典法に違い、政體を虧く有り。請一にこれを斷ぜんことを請う、と。これに従う。『晉書』卷二〇 禮志

中)

東晉孝武帝の太元十三年に、孔安國を侍中に任じようとしたところ、屬僚である黃門郎の王愉が父の諱と同じであることを理由に配置換えを要求した、という記事である。孔安國の希望は結局かなわなかったものの、彼が配置轉換を願ひ出たのには先例があったからで、尙書(五兵尙書と思しい)安衆男であった先なる人物——安衆男という爵號と、その父の諱が祐であることから、八王の亂の際に殺害された劉祐の子であり、東晉初期の事例と考えられる——⁽²⁰⁾ が、屬僚である中兵曹の尙書郎の諱が父の諱と同じであることを理由に配置換えを要求し、それが許可されて別の曹の尙書となった、というのである。

有司の議が『禮記』曲禮の一節を引用して「君所無私諱」と述べるように、君主の前では己の父の諱を避けない、というのが本来の禮の規定であった。しかし過剰な孝の實踐によって、「家禮」が「王制」に優越する事態を招いてしまったのである。

この様に、私諱などといった、禮の規定では本来は許されないはずの理由によって解職が可能となっていた裏側で、自身の疾病を理由にした解職も許可されるようになったのではないかと推測する。⁽²¹⁾そしてそれは晉南朝を通じて、自身のみならず兩親の病氣、あるいは兩親が老いたことを理由に解職が可能となるまで擴大していったのであった。⁽²²⁾

上記の如く、西晉にて生じた解・解職の制度は晉南朝を通じて、唐律・唐令が規定する制度へと近づいていくのだが、前章にて、晉南朝では省官によって官を解かれた際には、唐制の如く現任と同等の地位が保證されず、それがまた晉南朝の制度的特質であると述べた。具體例を挙げよう。

大明二年、東海王禕の平南司馬・尋陽太守・行江州事に除せらる。復た義陽王昶の前軍司馬と爲り、(尋陽)太守故の如し。昶尋で府を罷め、司馬の職解け、寧朔將軍を加え、太守を改めて内史と爲す。『宋書』卷八四 袁顥傳)

ここに挙げたのは、南宋孝武帝期の袁顥の人事記録である。解説すると、袁顥は大明年間に、平南將軍・江州刺史であった東海王劉禕の司馬に除せられ、尋陽太守を帯び、行江州事となった。ついで後任の江州刺史、義陽王劉昶の前將軍司馬となり、引き續き尋陽太守を帯びた。大明三年、劉昶が護軍將軍へと轉出するのにもない、後任として桂陽王劉休範が冠軍將軍・江州刺史となったが、⁽²³⁾袁顥は劉休範の軍府の一員とはならず、従前の前將軍司馬にかえて寧朔將軍を加えられ、さらに大明四年に孝武帝の皇子、劉子房が尋陽王となったことにより、⁽²⁴⁾尋陽太守から尋陽内史となった。

袁顥は足かけ三年の間に三度人事異動があったわけだが、ここで注目しなければならないのは、前將軍司馬のかわりに寧朔將軍が與えられている点である。袁顥が前將軍司馬を解かれているのは、劉昶の轉出によって前將軍府が消滅したか

らであり、まさしく省員による解職である。冒頭にて指摘したが、當時の官人の地位は、必ずしも單獨の官職によって表象されるのではなく、加官などを含めた、官人が帯びた官職全體によって表象されていた。よって、任期滿了前に滿敍や滿報を與えることなく一方的に解職してしまうと、現任と同等の地位を保證してやることができず降格になってしまうために、前將軍司馬の代替として寧朔將軍が加えられているのである。換言すれば、前將軍司馬が寧朔將軍に置換されたわけである。

服闋き、五兵尙書に遷るも、猶お療に頓しむこと時を經、拜受に堪えざるを以て、乃ち更めて散騎常侍を授け、步兵校尉を領し、東宮に侍せしむ。尋で改めて中庶子を領す。昭明太子薨じて官屬罷め、又た右游擊を領す。國子祭酒に除され、常侍故の如し。『梁書』卷二一 殷鈞傳

次に擧げるのは、梁武帝期の殷鈞の事例である。殷鈞は母の喪に服した後五兵尙書となったが、疾病のため散騎常侍領歩兵校尉となり、その後歩兵校尉にかわって太子中庶子を領した。しかし昭明太子が薨去して太子不在となり、皇太子關連の官職は全て廢止されたため、右游擊將軍を領し、最終的には國子祭酒・散騎常侍へと轉じている。これも先程と同じく昭明太子の死に伴う省員によって太子中庶子を解職され、殷鈞の地位を保證するために太子中庶子と同じく十二班の右游擊將軍が加えられており、やはり太子中庶子が右游擊將軍に置換されているのである。

上述の事例において、解職された官職の代替として用いられているのが、將軍號——しかも内號・外號を問わない——である。無論、省員による解職の際に、虛號化しなかった領軍・護軍將軍や左右衛將軍が代替として用いられることはなかったであろうし、將軍號だけが代替となったわけではなかった。殷鈞と同じく、昭明太子の死によって太子中庶子を解かれた陸襄の例を擧げよう。

服闋き、太子中庶子に除され、復た管記を掌る。中大通三年、昭明太子薨じて官屬罷む。妃蔡氏金華宮に別居し、(陸)

裏を以て中散大夫・領歩兵校尉・金華宮家令・知金華宮事と爲す。〔梁書〕卷二一 陸襄傳)

陸襄は昭明太子の死後、その妃に仕えるため、中散大夫・領歩兵校尉・金華宮家令・知金華宮事となっている。このように代替として大夫を用いる例も存在したのであるが、晉南朝の大夫は隋唐以後の大夫ほどバリエーションが充實しておらず、外號・内號ともに幅廣い序列を形成していた將軍號の方が官職の代替として用いられる頻度は高かったと思われる。²⁶⁾

省員によって解かれた官職と將軍號が置換された事例を挙げたが、任期滿了前に解職された場合においても、代替として將軍號が加えられていたことを推測しうる。

(元嘉)十二年、侍中に遷り、中庶子故の如し。尋いで改めて游擊將軍を領す。十三年、彭城王義康司徒左長史劉斌を以て丹陽尹と爲さんと欲すれど、上許さず、乃ち尙之を以て尹と爲す。〔宋書〕卷六六 何尙之傳)

何尙之は南宋文帝の元嘉十二年に侍中領太子中庶子となり、翌十三年に丹陽尹に任ぜられたのであるが、丹陽尹へと轉出する前に、中庶子にかわって游擊將軍を領していて、殷鈞の散騎常侍領太子中庶子から散騎常侍領右游擊將軍への異動とほぼ同様の措置であるということが出来る。²⁷⁾ さきに南朝の地方官の任期が六年から三年に短縮されたことを述べたが、残念ながら當時の中央官の任期は不透明といわざるを得ない。しかし、一年に滿たない間に太子中庶子の任期が滿了したとは到底考えられず、省員によって解かれた官職の代替が充當されたと同様、任期滿了前に官職が解かれた場合にも(無論過失による解職ではないことが條件であろうが)代替として將軍號が加えられたと考えることが出来る。

文帝に續く孝武帝期にも同様の事例が見える。

會たま世祖位に即くも、任遇改たむる無し。大司馬長史に除され、侍中に遷り、太子中庶子を領す。……改めて驍騎將軍を領し、親遇隆密なること、舊臣に加うるあり。吏部尙書に轉ず。〔宋書〕卷五九 何偃傳)

何尙之とは異なり、何偃の異動が何年になされたのか明らかにし得ないが、やはり何尙之と同様に、太子中庶子にかわっ

て驍騎將軍が與えられており、これも官職の置換と見なすことが出来よう。

さらに、辭退した官職の代替として將軍號を用いる事例もある。

昇明二年、左軍長史・尋陽太守に轉ず。府に隨いて鎮西長史・南郡太守に轉ず。府主豫章王(蕭)嶷既に王に封ぜられ、(王)秀之遷りて司馬・河東太守と爲るも、郡を辭して受けず。寧朔將軍を加う。(『南齊書』卷四六 王秀之傳)

王秀之は南宋末、使持節・散騎常侍・都督江州豫州之新蔡管熙二郡軍事・左將軍・江州刺史であつた蕭嶷の長史となつて尋陽太守を帶び、蕭嶷が使持節・散騎常侍・都督荆湘雍益梁寧南北秦八州諸軍事・鎮西將軍・荊州刺史へと轉任するのに従つて、引き續き長史のまま今度は南郡太守となつた。宋齊交替を経て蕭嶷が豫章王に封ぜられた後、彼は司馬となり(長史から司馬への異動は降格となるが、このケースは單なる軍府の長史から皇子の軍府司馬への轉任であり、少なくとも横滑りか、あるいは昇進であつたと思われる)今度は河東太守を帶びさせようとしたが、王秀之がそれを辭退したために、太守にかえて寧朔將軍を加えている。

(天監)十一年、位を司空に進め、侍中・尹故の如し。(王)茂京尹を辭し、改めて中權將軍を領す。(『梁書』卷九 王茂傳) つづいては梁代の事例。侍中・司空・丹陽尹となつた王茂(王茂先)が丹陽尹を辭退し、かわつて中權將軍を與えられていることがわかる。

また少々特殊ではあるが、次の事例も辭退した官職の代替として將軍號を用いた事例といえるだろう。

入りて侍中・護軍將軍と爲る。國憂を以て侍中を解き、中軍將軍を加う。(『南齊書』卷三四 高帝十二王傳・蕭晃)

南齊高帝の皇子であつた長沙王の蕭晃は建元年間に侍中・護軍將軍となつたが、高帝の崩御によって侍中が解かれ、かわりに中軍將軍が加えられている。南宋以後の皇子達は上級官僚となり、侍中・散騎常侍など貂蟬をつける官を加えられることが多いが、父母の死に際しては、一般の官人が離職して喪に服すのとは異なり、侍中や散騎常侍を解き貂蟬をはずす

ことによって喪に服するのである。⁽²⁸⁾ 父母の死によって侍中・散騎常侍を解かれた皇子全てに將軍號が加えられたわけではないが、辭退した官職の代替として將軍號が加えられた事例に含めることは可能であろう。この類例として次の様なケースもある。

出でて都督荆湘雍益梁巴寧南北秦九州諸軍事・鎮西將軍・荊州刺史と爲り、持節・常侍故の如し。鼓吹一部を給す。國憂を以て散騎常侍を解き、號を征西に進む。〔南齊書〕卷三四 高帝十二王傳・蕭映)

これはやはり南齊高帝の皇子・臨川王蕭映の事例で、先に引用した蕭晃の同母兄にあたる。弟同様、父の喪に服するために散騎常侍を解き貂蟬をはずしたのであるが、代替として新たに將軍號を加えるのではなく、既に與えられていた鎮西將軍が征西將軍へと引き上げられているのである。

しかしながら、當時の全ての官人に解かれた官職の代替が與えられたわけではなかった。前章で引用した蕭昭文・蕭鸞の詔敕では、兩名潛龍時代の王國の官人は、五品以上のものには滿敘が賜與されて地位が保證されたが、六品以下は解遣——解散させられていた。「其れ仕えんと欲する者、其の樂う所を適えよ」と言うものの、王朝内交替とでもいうべき蕭昭文・蕭鸞の即位の際、下級官人の望みを叶えられるだけのポストを用意できたかはなほだ疑わしい。彼らには代替の將軍號など與えられず、換言すれば蕭昭文・蕭鸞即位直前に彼らの王國にて勤務したキャリアは無かったことにされた可能性が高い。

また、前將軍司馬を解かれたかわりに寧朔將軍を與えられた袁顥の例を先に引いたが、それ以下の參軍レベルの場合、輔國參軍に起家するも、府解けて家に還る。〔宋書〕六二 羊欣傳)

(天監)二年、吳平侯蕭景南兖州刺史と爲るに、引きて冠軍錄事と爲す。府遷りて職解く。〔梁書〕卷三〇 裴子野傳)とあって、省員によって參軍が解かれた後に代替が與えられることもなく、ケアが全くなされていない。つまり、省員な

ど現任と同等の地位が保證されないタイプの解職にさいして、解かれた官職の代替として將軍號を用いるという制度は中級・上級官人のみを對象としていたのである。こうした制度的缺陷が晉南朝の貴族制を支えていたと見ることもできるであろう。すなわち、皇子や一流貴族が頻繁に轉任し、足早に出世していく裏側で、下級官人は上司の轉出や省員などによって職を解かれ、キャリアを蓄積させることもかなわず足踏みを餘儀なくされていたのである。しかし、解職の代替が與えられることなく切り捨てられていった連中は、時として「失職の武人」として、王朝を動搖させる力となったのであった。⁽²⁶⁾

結びにかえて

以上、滿報と滿敘の解釋について、また省員や任期滿了前に解かれた官職の代替として將軍號が用いられてきた事例について紹介してきた。周知の通り、梁代に九品制から十八班制へと移行した際、外號將軍は十八班から切り離され、独自の序列を形成するにいたる。従来の研究では、『大唐六典』などの記述を無批判に受けいれ、梁代に獨立した外號將軍を唐代武散官のごとき階官とみなしてきた。近年、岡部毅史氏はそうした先行研究に對して疑義を呈し、梁代の外號將軍は獨立した序列を形成してはいるが隋唐散官の如く官人の本品を表示する機能はなかったと指摘された。⁽³⁰⁾ 本論で見てきたように、南朝を通じて解かれた官職の代替として用いられた將軍號に内號・外號の區別はなかったという點も岡部氏の結論を補強するであろう。

ただし、陳奕玲氏が指摘されるように、疾病や免官からの復職に際して、さながら階官のごとく將軍號が用いられる場合もある。⁽³¹⁾

明帝立つや、文季を起てて寧朔將軍と爲す。〔『南齊書』卷四四 沈文季傳〕

沈文季は中書郎であったが、父・沈慶之が前廢帝によって自殺させられた際、兄弟達とともに捕らえられるところを逃れた。明帝の即位後、寧朔將軍として復歸している。これはまさしく官人の地位が將軍號のみによって表示されている事例である。しかし『南齊書』沈文季傳は續けて

太子右衛率、建安王司徒司馬に遷る。赭圻平らぐや、宣威將軍・廬江王太尉長史と爲す。

とも記す。沈文季は太子右衛率、建安王司徒司馬を経て廬江王・劉綽の太尉長史となる際に、將軍號は宣威將軍とされており、將軍號の官品は四品から八品へと降格している。無論、これは單純な降格人事ではなく、寧朔將軍のまま太尉長史にしてしまうと昇進しすぎになってしまうので、將軍號を逆行させてバランスを取っているのである。

前引の『南齊書』沈文季傳の記述は、岡部氏の結論をさらに補強する史料といえる。しかし筆者が指摘したいのは、晉南朝の將軍號が、本品であるか否か、換言すれば唐制と同じか否かという議論に終始するのではなく、唐制へと轉換をとげる前段階としての晉南朝の制度的特質にも注意を拂うべきだ、という點である。西晉に解職という制度が生まれ、解職理由が晉南朝を通じて擴大するのと對應して、省員などによって任期滿了前に解かれた官職の代替として主に内號・外號を問わず將軍號が用いられた。時には將軍號一つだけで官人の地位全體が表象される場合もあれば、官人の地位の一部のみを表象する場合もあったのである。隋唐散官が形成される前段階として、一見無節操ではあるけれども、晉南朝期において將軍號が彈力的に運用されてきた事實に注意しておくべきであろう。

注

- (1) 岡部毅史「晉南朝の免官について——「免所居官」の分析を中心に——」『東方學』一〇一、二〇〇一。
- (2) 藤井律之「魏晉南朝の遷官制度に關する二三の問題——侍中領衛を中心として——」『東方學報』七八、二〇〇六。
- (3) 大庭脩「魏晉南北朝告身雜考——木から紙へ——」『唐告身と日本古代の位階制』、學校法人皇學出版部、二〇〇三。ただし、題名が示すように、大庭氏の研究對象は魏晉南朝のみならず北朝をも對象として

- いる。野田俊昭「晉南朝における吏部曹の擬官をめぐって」(『九州大學東洋史論集』六、一九九七)。
- (4) 越智重明「六朝の免官、削爵、除名」(同氏『中國古代の政治と社會』下篇第五章、中國書店、二〇〇〇)。中村圭爾「除名について」(『六朝貴族制研究』第三篇第一章、風間書房、一九八七)。注(1) 前掲岡部論文参照。
- (5) 宮崎市定「南朝における流品の發達 九 勳位の成立」(宮崎市定『九品官人法の研究——科舉前史』第一編第三章、東洋史研究會、一九五六)。また『宮崎市定全集』6、岩波書店、一九九二、および『九品官人法の研究——科舉前史』、中公文庫、一九九七。なお、中村圭爾氏もこの記事に注目しておられるが(『品秩の形成』、同氏注(4) 前掲書第一篇第一章)、滿報については觸れておられない。
- (6) 『南齊書』卷三七 虞悺傳
- (7) 昇明中、世祖爲中軍、引悺爲諮議參軍……建元初、轉太子中庶子。鮑照『鮑參軍集』「侍郎滿辭閣」
- (8) 臣言、臣所居職限滿、今便收迹。金閨雲路、從茲自遠、鮪經沈藏、方絕光景、祇戀遲迴、結涕濡泗。
- (9) 梁朝成立後に、蕭衍の霸府から轉出した人物として、次のような例を挙げることができる。
- (10) 高祖霸府開、以瞻爲大司馬相國諮議參軍、領錄事。梁臺建、爲侍中、遷左民尚書、俄轉吏部尚書。(『梁書』卷二一 王瞻傳)
- (11) 霸府開、以志爲右軍將軍・驃騎大將軍長史。梁臺建、遷散騎常侍・中書令。(『梁書』卷二一 王志傳)
- (12) 高祖霸府開、以充爲大司馬諮議參軍、遷梁王國郎中令・祠部尚書・領屯騎校尉。(『梁書』卷二一 張充傳)
- (13) 梁臺建、以爲驃騎記室參軍、遷相國西曹掾。天監元年、除撫軍長史、母憂去職。(『梁書』卷二六 陸泉傳)
- (14) 高祖霸府建、引爲相國主簿。天監初、臨川王已下置置友・學。以率
- (15) 爲鄱陽王友、(『梁書』卷三三 張率傳)
- (16) 高祖平京邑、霸府開、引爲驃騎主簿、甚被禮遇、時勸進梁王及殊禮、皆遲文也。高祖踐阼、拜散騎侍郎。(『梁書』卷四九 文學傳上・丘遲)
- (17) 一見して明らかなとおり、霸府からの異動先は特定の官署に限定されていない。
- (18) 川合安「沈約の地方政治改革論」(中國中世史研究會編『中國中世史研究 續編』、京都大學學術出版會、一九九五) 参照。
- (19) 大庭脩「漢代における功次による昇進」(同氏『秦漢法制史の研究』第四篇第六章、創文社、一九八二)。
- (20) 佐藤達郎「漢代官吏の考課と昇進——功次による昇進を中心として——」(『古代文化』四八・九、一九九〇)。
- (21) 品式令、前官被召見、及赴朝參、致仕者在本品見任上、以理解官者在同品下。(『資治通鑑』卷二〇九 唐紀二五・中宗景龍二年條胡三省注)
- (22) 品式令は公式令のあやまり。
- (23) 注(1) 前掲岡部氏論文参照。
- (24) 遷博士、未召拜、親疾、輒去官免。(潘岳「閑居賦」(『文選』卷一六) 後述するように、のちには親の疾病による解職も許可されるようになるのだが、ここでは理由申請せずに、勝手に官を去ったために免とされていると考えられる。類例の例として、
- (25) 臧榮緒晉書曰、崇爲大司農、坐末被書擅去官免。(『文選』卷四五 石崇「思歸引序」注)
- (26) を挙げることができる。いずれの場合にも「免」が付されており、正當な理由無く去官した場合にはペナルティが科されたことが分かる。
- (27) 大庭脩「漢代官吏の勤務と休暇」(同氏注(10) 前掲書第四篇第七章)。
- (28) 『晉書』卷三 武帝紀
- (29) (泰始元年十二月) 詔曰……諸將吏遭三年喪者、遺寧終喪。

(泰始三年) 三月戊寅、初令二千石得終三年喪。

(太康七年十二月) 始制大臣聽終喪三年。

(17) 陳戌國「晉朝喪葬禮儀(下)」、(同氏『中國禮制史』魏晉南北朝卷・第二章第七節、湖南教育出版社、一九九五)。

(18) 神矢法子「晉時代における王法と家禮」、『東洋學報』六〇・一・二、一九七八。

(19) 無論、こうした官人の我が儘が全て認められたわけではなく、當局によって拒否される場合もあった。注(18) 前掲神矢氏論文参照。

(20) 劉祐の一族は漢代から安衆侯を襲封してきたが、安衆男に封ぜられたのは劉祐の父・劉喬で、西晉の惠帝期のことである。

劉喬字仲彥、南陽人也。其先漢宗室、封安衆侯、傳襲歷三代。……豫誅賈謐、封安衆男、累遷散騎常侍。……時河間王頤方距關東、倚喬爲助、不納其言。東海王越移檄天下、帥甲士三萬、將入關迎大駕、軍次于蕭、喬懼、遣子祐距越於蕭縣之靈壁。劉禕分兵向許昌、許昌人納之。琨自祭陽率兵迎越、遇祐、衆潰見殺。喬衆遂散、與五百騎奔平氏。『晉書』卷六一 劉喬傳

(21) 西晉時代の疾病による解職事例として次の例を挙げることが出来る。入爲散騎郎、遷城陽太守。伐吳有功、封安陽鄉侯。在郡雖有職務、好學不倦、以疾自解。頃之、拜黃門郎。『晉書』卷三三 石崇傳

石崇は城陽太守となった後、病と稱して郡守の任を「自解」したが、その後おなじ五品官の黃門郎となっており、免官とは異なる。ただし「以疾免」(『晉書』卷六八 紀瞻傳)「以久疾免官」(『宋書』卷七〇 袁淑傳)などの事例もあるので、おそらく病氣である旨を申告した上で解職を申請するなどの手続きが必要があったと思われる。

親の疾病による解職申請として次の例を挙げることができる。

(22) 累遷梁仁威南康王限内記室、書侍御史。以父疾陳解。『南史』卷三〇 何炯傳

また親が老いたことを理由に解職可能であったことは次の史料から推

測可能である。

母本側庶、籍注失實、年未及養、而籍年已滿、便去職歸家。時鎮軍將軍顧覲之爲州上綱、謂曰、尊上年實未八十、親故所知。州中差有微祿、當啓相留。子平曰、公家正取信黃籍、籍年既至、便應扶持私庭、何容以實年未滿、苟冒榮利。且歸養之願、又切微情。『宋書』卷九一 孝義傳・何子平

事平、爲司徒左西曹。母年八十、籍注未滿、岱便去官從實還養、有司以岱違制、將欲糾舉。宋孝武曰、觀過可以知仁、不須案也。『南齊書』卷三二 張岱傳

『宋書』孝義傳では、戸籍の誤記によって母親が八十歳となる前に何子平は官を去った。一方『南齊書』張岱傳では母親は八十歳となっていたが、籍注が満ちる前に張岱は官を去っているため、兩者とも「便去職」「便去官」(輒去官に同じ)とされているが、親が八十歳となり、籍年・籍注が満ちれば問題なく官を去ることができたと推測することができる。

(23) 『宋書』卷六 孝武帝紀

(大明三年七月) 戊子、以衛將軍・護軍將軍東海王暕爲南豫州刺史、衛將軍如故。江州刺史義陽王昶爲護軍將軍、冠軍將軍桂陽王休範爲江州刺史。

(24) 『宋書』卷八〇 孝武十四王傳・劉子房

大明四年、年五歲、封尋陽王、食邑二千戶。

(25) 内號あるいは外號將軍という呼稱を用いたのは宮崎市定氏であった(同氏注(5) 前掲書第二編第四章「梁陳時代の新傾向 六 將軍號」)。ここで宮崎氏は内號・外號將軍について「内號とは中央政府の一部をなすもので、天子の直屬下にある軍隊を指揮する將軍である：(中略)……これに對し外號は地方の都督、刺史以下の帶する將軍號で地方兵を指揮するか、或いは指揮する筈の文武臣に與えられる。内號將軍は流内十八班のその中にその名を列ねているが、朝廷に儀式などあ

(26)

る場合は彼らもそれぞれの班に従って列席するのである」と定義しておられる。この理解に従えば、梁の十八班制施行後も十八班内に残った將軍號を内號將軍、十八班から獨立して獨自の序列を形成した將軍號を外號將軍と定義したと解釋できるのであるが、宮崎氏は續けて「別系統に列せられた將軍の中にも、四中將軍、即ち中軍將軍、中衛將軍、中撫將軍、中權將軍の如きは、ただ施して内にありと注記され、便宜上この表の中に加えただけで實は内號將軍なのである。八鎮將軍の中、左右前後の四鎮、八安將軍の内、前後左右の四安も同様である」と、外號將軍として獨立した筈の將軍號の中にも内號將軍が含まれるとしているため、氏の定義は少々複雑である。本稿では極めて單純であるが、梁の十八班制施行後も十八班内に残り續けた將軍・校尉等を内號將軍、十八班から獨立して獨自の序列を形成した將軍號（およびその淵源となる驃騎將軍や寧朔將軍などの將軍號）を外號將軍と定義する。

ただし、本文中でも述べた様に、南朝中期以降においても虚號化しなかった領軍・護軍將軍や左右衛將軍が代替として用いられることはなかった。それら以外の内號將軍が虚號化していたことについては、注

(2) 前掲藤井論文參照。

(27) 宋齊時代の游擊將軍に変わって梁代に游騎將軍が置かれ、その一班上に新たに左右游擊將軍が置かれた。しかし、侍中や散騎常侍が領する際には、新設された游騎將軍ではなく、宋齊以來盛んに行われた游擊將軍との組み合わせが重視されたと思われる。注(2) 前掲藤井論文參照。

(28) 『南齊書』卷二十一 豫章文獻王傳

太祖崩、疑哀號、眼耳皆出血。世祖卽位、進位太尉、置兵佐、解侍中、摧班劍爲三千人：服闋、加侍中。

(29) 『宋書』卷七十一 文九王傳・劉景素

由是冠軍將軍黃回・游擊將軍高道慶・輔國將軍曹欣之・前軍韓道清・長水校尉郭蘭之・羽林監垣祗祖、竝皆響附、其餘武人失職不得志者、莫不歸之。

(30) 岡部毅史「梁陳時代における將軍號の性格に關する一考察——唐代散官との關連から——」『集刊東洋學』七九、一九九八。

(31) 陳奕玲「魏晉南朝軍號散階化的若干問題」『燕京學報』新一三期、二〇一〇。